

二ツ岩マミゾウという妖怪を一言で言い表すならば、『愛される金貸し』である。それを裏付ける逸話のひとつに、『マミゾウは大通りを真つ直ぐ歩けない』というものがある。

妻入りの木造建築がずらりと軒を連ねた人里の大通りには、当然、人の往来が絶えないものであるが、マミゾウはそこを行き交う人々ないし店を構える商人——そのほとんどと顔見知りであった。通りの向かいに知人を見付ければマミゾウは自ら進んで挨拶を交わしにゆくし、そんなマミゾウを商い人が見付ければ、ちよつと寄つていきなさいな、とまた反対側から呼び声が掛かつてさらに足を運ぶことになる。それにマミゾウは酒がたいそう好きだった。「どうですか、一献」と誘われればまず断ることはない、と自ら豪語するほどで、そのまま美味い日本酒を求めて朝まで酒屋

を梯子することもしばしばだった。こうした様子に尾ひれが付いて逸話となつたのであろう。

土農工商の風土が色濃く残る幻想郷の人里で、嫌われ者の代名詞ですらある金貸し業を上手く営んでいくのは本来とても難しいことである。

幻想郷入りしてまだ間もないマミゾウがこうも人気を博しているのは、ひとえに彼女の深い懐任侠とも通じる人柄の良さ、器量うらわの大きさによるもの……と賞賛すべき所なのであろうが、実のところ、それらの他にもこの世間慣れした狸の大妖怪は、人の世に溶け込むための切り札を隠し持っていたのである。

それが無利子の金貸しである。

マミゾウは自身の『物を化けさせる程度の能力』を上手く利用し、そのシステムを幻想郷の中で見事に完成させていた。

例えば博勞ばくろうという、馬や牛の飼育や売買、仲介

を主に執り行ふ職業がある。ある男がこの職で生計を立てたいと考えた場合、通常であれば彼は金貸しの元を訪ねて媚を売り、必要資金を現金で借り入れ、一定の期日が過ぎる前に『収益が上がる／上がらぬ関係無しに』元金に利子を加えた分の金を返済しなくてはならない。だがその話をマミゾウの所へ持つて行くと、同じ取引が随分変わった様相を示す。

まず男は当然、その業務についての構想をマミゾウに話すのであるが、この時最も重視されるのは、旗揚げをするのに何がどれだけ必要かという物品に関する事項なのである。例の男の場合であれば、 $3.6\text{m} \times 7\text{m}$ の馬房12房、 $3.6\text{m} \times 7.2\text{m}$ の牛房8房分のスペースのある厩舎を一棟、牛馬をそれぞれ10頭と8頭、飼料がどれだけ、鞍や蹄鉄などの装具が……といった案配だろう。そして、マミゾウはその構想に将来性があると見ると、紙面

に提示された必要物品をすべて自腹で購入する。そうして得られた固定資産を、マミゾウが男に貸し付ける（リースする）のである。これには支払期限というものが存在しない。事業が成功すれば、男はマミゾウが立て替えていた必要経費を全額支払い、あらかじめ定めておいた成功報酬を手渡すことで取引が完了するのである。むろん、男が破産した場合はマミゾウも共倒れを喰らうことになる。が、そこがマミゾウの識別眼と、『物を化かす程度の能力』の活かし所だった。

馬や牛といった生物は難しいが、厩舎や装具などの物品は『化かす』ことが出来る。ただし、いくら二つ岩の大妖怪といえども、建物を丸々一棟化かすのは骨が折れる作業である。ゆえに叶えば廃墟、叶わぬならばせめて資材を集め、簡単に組み立てたそれらを化かすことで提供するのだ。依頼者に金が貯まるまでの間に合わせ、と言